

知恵くらべ生涯学習

—生涯学習の現場から—

—27—

生涯学習を援助する相談事業

昭和音楽大学短期大学助教 西村 美東士

学習情報システムはやりたくないけど、
学習相談はやってみたい……？

ベテランの関係職員などの中には、学習情報のシステム化に対していまだに消極的な人もいます。たしかに、学習情報の収集・整理は、地味で根気のいる作業である。せっかく集めた情報も、すべてが有効とは限らない。何らかの事情で個人的にはあまり勧める気がない学習機会などであっても、情報は提供しなければならぬ。さらには、情報提供によって、その住民がすばらしい成長を得たとしても、その成果を「見届ける」ことはできないことが多い。このようなことから、人間の交流や社会教育の味を知っている人ほど、システム構築をいやがる傾向が強い。

ところが、学習相談なら、ベテラン職員の頭の中にある豊かな情報を有効に活用することができ。有益だと確信できる情報だけを提供すればよい。さらに、日常行っている相談であれば、その成果も追跡できる。

学習情報のシステム化には消極的であっても、学習相談については、「やりましょう」とか、「そういうことなら、すでに、日常的にやっていますよ」という答えが返ってくる人が多いのは、そういう理由からであろう。

しかし、現代社会において生涯学習の援助者に求められていることは、そういう従来からの相談における指導力とは、若干、性格が異なる。社会教育が築き上げた遺産のうちには継承すべき点多々あるのだが、援助者と学習者とがよりいっそう対等な人間同士としてつき合う水平なネットワークとしての新しい学習相談が必要なのである。

個に対応できる相談

学習情報提供システムの整備が各地で行われるようになってきている。そういう所では、学習相談も不可分のものとして位置づけられていることが多いようである。しかし、その実態が、たんにコンピュータから情報を引き出す操作を代行してただけであれば、それは相談とは呼べない。相

談には、情報提供だけではない何かが求められる。神奈川県では、本年五月、横浜市西区の県立図書館の中に、「神奈川県学習・文化情報センター」をオープンした。これは学習情報システムとともに学習相談を行うものであるが、そのために五人の相談員をおいている。校長退職者である。長い教職の経験が学習相談に役立つであろうし、また、相談の過程で、五人が奉職したそれぞれの地域の関係機関との連絡・調整の必要が生じた場合も、非常にスムーズだということである。

相談に応ずるために専門の職員を置くということとは、学習者の個々のケースに対応できるということである。たとえば、同じ英会話であっても、どのレベルのものをどのような雰囲気の中で学びたいのか、実際にはそのケースは無数に分かれていく。学習者自身にとっても、それらのニーズは整理された上で相談に来るのではない。むしろ、いろいろと話をして相談員に聞いてもらっているうちに、だんだんと自分の本当の学習ニーズがわかってくるのである。

この場合、相談員と相談者との水平なネットワークの関係が求められる。相談員が学習の「權威者」として相談者に接してしまえば、主体的な生涯学習にとってはかえって逆効果である。相談者の言葉を傾聴する、いっしょになって情報や資料を探するなど、相談者と対等な人間として、本人の学習の「迷路」につきあう中で、相談員もともに育つことができるのである。

このように学習相談とは、人手と手間のかかるものである。顧客待ちしている相談事項をコンピュータを操って能率よく処理していくことが相談なのではない。

カウンセリングとしての相談

昨年四月、埼玉県県民活動総合センターが開館すると同時に、県民活動相談事業が開始された。ここでは、ボランティア、社会福祉、社会教育、婦人、青少年、高齢者などに関わる諸活動に関する「活動相談」や「生涯学習相談」とともに、活動上の悩みに関する相談としてカウンセリングを行っている。カウンセリングは週に一日だが、それ以外の相談は、毎日受け付けている。

そのために、カウンセリングの研鑽と実践の経験を長年、積み重ねてきた専任相談員が配置されており、その人たちは、「活動相談」などの通常の相談も受け持っている。

しかし、そういう通常の相談の中にも、じつは、カウンセリングとしての相談の要素が必要になる場合があるという。たとえば、あるリーダーが、「自分は一生懸命やっているのに、なぜ自分の団体が活性化しない」という相談を持ちかけてきたとする。その人は、最初は団体活動活性化のノウハウを求めにくる。しかし、相談の中で団体の問題を話しているうちに、リーダーとしての自分の問題に気づくことがある。「自分には、他人を支配したいという気持ちがあったのではな

いか。団体活性化の問題とリーダーやメンバーの心の内面の問題とは、切り離せない複雑な関係があるのだ。相談を持ちかけた人が自分の心の内面に気づくためには、相談を受ける側が、たんなる情報提供だけではなく、受容、確認、明確化などのカウンセリング的な対応をしながら、その人の話に共感的に耳を傾けなければならぬ。

カウンセリングそのものの事例もある。たとえば、団体の役員などから、神経症的な問題の相談をいくつか受けている。そういう人たちは、まじめできりぎりまで頑張ってしまう性格なので、リーダーにも推されてしまう。そして、グループ内の人間関係やリーダーとしての悩み、それらと分けることのできない自分の個人的な悩みなどが重なって、神経症状を引き起こしてしまうのである。

こういう人たちに、「気にしない、気にしない」とか「頑張ってね」などと言ってはいけないということは、カウンセリングの常識である。これらの言葉は、こういう場合に絶対言ってはならない傲慢な言葉である。本人は気にしたくないのに気にしてしまうのだし、頑張らなくてはいいなと思ひ込む気持ちがこういう症状を引き起こしているからである。あるいは、頑張りうと思っても頑張れない何かがあるかもしれない。

不用意な言葉は、せっかく相談に訪れてくれた人に「ああ、やっぱり、わかってもらえない」という絶望感を与えてしまう。本人が自分の本当の問題に気づくことを援助することが大切なのであ

って、「人の目を気にしないようにする」とか「頑張ってみる」など、その問題をどう解決するかについては、本人が決めることなのである。それについては、援助者側は、多様なチャンスやノウハウなどの情報を提供するだけでよい。

センターのカウンセリングを受けている人の中には、半年以上も前に配った案内のチラシをずっと持ってやっと訪れてくれる人も多いという。心臓が止まるほどの苦しい思いをしているが、それは、人には言えない。そういう悩みを持ちながら生涯学習の諸活動に取り組んでいる人たちのために、カウンセリングが用意されていることと自身が、相談件数などの効率上の問題以前の大切なことである。

従来の学習援助では、個人よりもマス(集団)が優先されがちであった。しかし、学習相談は、学習援助者の目を、「個の深み」ともいうべき人間一人ひとりの深さに向け直させてくれる。

「個の深み」は、ときには弱く脆い(もろい)ものであるが、個人の弱さの露呈とそれが受容される体験が、かえってその人の「深み」の獲得へとつながることがある。そのためには、教育が築き上げてきた人間の可能性への絶対的な信頼とカウンセリングが大切にしている自己解決能力への信頼の姿勢を、援助者側があらためて持ち直さなければならぬ。学習相談は、「個の深み」が発揮される新しい生涯学習援助の形態を提起しているのである。